

ずっと同じアルバイトをしていると、同僚の身の上話が集まってきて、正直に言えば、それを楽しんでしまっている自分がある。

あの人は大学で今年留年をしてしまって、あの人は子供が三人いる45歳のおじさんで、あの人はぼくのひとつ上の歳なのにバツイチ子持ちで（……！）。

そうやってストーリーが積み重なっていくうちに、ぼくにとってのそのお店は、ただ作業をこなしてお金をもらう場所から、ひとりひとりが登場人物として台詞を話して演技をする舞台へと、色づいていく。

ヘミングウェイの『移動祝祭日』は「もし、読者がお望みなら、この本は小説とお考えくださいってもよい」というト書きからはじまる。その内容は若き日のヘミングウェイがパリ時代の生活を回顧し、淡く情緒的に描写をしたもので、1920年のパリが脳裏に浮かぶような現実感を持った、ふしぎな、“文章群”である。

そして、そのなかに贅沢にばらまかれた、欧米ロマン的なオブジェクトを読み集めて、ぼくはそれらをコレクションせずにはいられない。なんとといっても、『サン・ミシェル広場の良いカフェ』からこの作品は始まるのだ。そして、文章を読み進めていけば、女流作家のガートルード・スタインの家で『良い絵』を眺め、セーヌ川のほとりで葡萄酒を楽しんで、『華麗なるギャッツビー』のスコット・フィッツジェラルドと親交を結ぶ。

おそらく現実とフィクション・ストーリーというのは白と黒に背反するものではなくて、色彩がなめらかに変化するグラデーションなのだろう。冒頭のぼくの“文章群”のように、みんな、色彩のはざままで、一日の連続を過ごしている。

『移動祝祭日』はその意味で言えば、現実とフィクション・ストーリーの色彩の変化のうち、ある一点の色の混ざりかたを示したのではなく、色彩グラデーションそのものを体現した、非常に珍しい“文章群”なのだろう。そしてその変化のようすは、悔しいことにとっても心地よくて、おしゃれで、すごくうつくしい。

そんな、あなたが世界を再定義できるような、おすすめの一冊である。